

# 京都府との共同企画事業報告

鎌田東二 Toji Kamata  
(こころの未来研究センター教授)

船橋新太郎 Shintaro Funahashi  
(こころの未来研究センター教授)

2008年度は、京都府とこころの未来研究センターとの共同企画事業として、「こころの広場」を3回開催し、シンポジウムを1回（「平安京のコスモロジー」）行った。

## 「こころの広場」第1回

日時:2008年6月22日13時～16時半  
場所:京都府庁本庁舎正庁  
演題:「こころと里山」  
講演者:高林純示(京都大学生態学研究センター長)  
湯本貴和(総合地球環境学研究所教授)ほか  
参加者:75名

第1部では、化学生態学者の高林純示京都大学生態学研究センター長

が「植物のかおりが織りなす生き物ネットワーク」と題し、京都府の農家での試験事例などを交えて講演した。高林氏は害虫の被害を受けた植物が匂いを変えることで、害虫を退治する天敵(ボディガード)を呼び寄せる情報を発信しているメカニズムを突き止め、里山の植物が自己防衛システムを張り巡らせていると指摘。香りを放出する装置として、「ハチクール」などの誘引剤の発明と使用の事例をわかりやすく、ユーモラスに語った。

第2部では、植物生態学者の湯本貴和総合地球環境学研究所教授が「花や果実で動物を操って生きる植物たち」と題し、共生と里山との概念と構造、および生物の共進化や相利共生の仕組みを語った。湯本氏は、日本の里山を、水田耕作を持続的に

行い、生態系サービス(自然の恵み)を得るために改変した自然であると規定し、里山が生き物のゆりかごであると指摘。また雑木林の残る里山こそ日本が誇るべき生物多様性の場であるとし、コウノトリなどの野生動物の生息が安全・安心の指標として機能することに注意を喚起した。

第3部では、総合討論「こころと里山——人々は里山をいかに作ってきたのか?」を行い、「こころ」を「里山」と関係づけながら、人間と自然環境との相互作用について討議。多様性や間接的相互作用という生態学での重要概念は、「こころ」の問題を考えていく際にも大きなヒントを与えてくれる。自由や自立・自律と関係性などを生態学をモデルとし鏡として考え直すことができ、メタファーとして、「こころの里山」ある



「第2回こころの広場」森下氏と桑原知子氏

いは「こころの生態学」をイメージすることで、こころの未来研究センターの活動のヒントとなるだろう。(鎌田)

## 「こころの広場」第2回

日時:2008年9月28日13時～17時  
場所:京都文化博物館  
演題:「引きこもりと教育臨床」  
講演者:森下(森下神経内科診療所所長)  
桑原知子(京都大学大学院教育学研究科教授)  
参加者:80名

精神科医の森下氏は「引きこもりの

子どもたちと向き合って」と題して講演し、臨床心理学者の桑原氏は「学校カウンセリングと心理臨床」について講演した。

森下氏は、戦後の子どもたちのこころの変化を児童精神医学の立場から説明し、子どもが元気になれず、不登校や引きこもりになり、自分を責め、悲しみ、暴力を振るったり、自分を攻撃する姿を臨床経験から報告した。見守ってくれる人の存在、良き人と出会うことの大切さ、こころの中心に聴くことなどを、生野学園の創立や鎌倉てらこやの活動を通して語った。

桑原氏は、「花が存在する」ので

はなく、「存在が『花する』」という存在論を取り上げ、「存在」がたまたま「花する」という存在認識は発想の転換で、不登校や引きこもりはなくすべきかという問いにもつながる。人間には自己変容性(自己治癒力)、多様性、関係性があり、物についた傷は決して治らないが、人間の傷は治る。その不思議さ、また見守ること(関心を持つが、手を出さないこと)、信じること、待つことの重要性を語った。(鎌田)

## シンポジウム

### 「平安京のコスモロジー」

日時:2008年11月30日13時～18時  
場所:芝罘会館稲盛ホール  
講演者:岡野玲子(漫画家)  
内藤正敏(写真家・民俗学者、東北芸術工科大学教授)  
河合俊雄(こころの未来研究センター教授)ほか  
参加者:227名

基調報告者として、漫画家の岡野玲子氏が「陰陽師から見た平安京」、写真家・民俗学者で東北芸術工科大学教授の内藤正敏氏が「平安京の宗



「第1回こころの広場」会場風景



「平安京のコスモロジー」会場風景

教構造——江戸・東京との比較の観点より」、臨床心理学者の河合俊雄（京都の未来研究センター教授）が「京都の癒し空間」を問題提起。パネルディスカッションでは、鳥居本幸代氏（京都ノートルダム女子大学教授、平安京文化研究）が「平安京の食とファッション」、原田憲一氏（京都造形芸術大学教授、地球科学・地質学）が「平安京の自然学」、中村利則氏（京都造形芸術大学教授、建築史・茶室研究）が「京の茶室とわび・さびの美学」、関本徹生（京都造形芸術大学教授、アーティスト）が「京の妖怪」を語り、討議した。なお、本シンポジウムの企画は、このころの未来研究センターの科研：モノ学感覚価値研究会と京都における癒しの伝統とリソース研究プロジェクトが担当し、京都造形芸術大学比較芸術学研究センターが後援した。

日本史の中でもっとも長く、千年を越す都が置かれたのが京都・平安京であるが、その平安京長期持続力を、水の都、祈りの都、芸術・技芸・ものづくり文化の都、里山盆地の都という4つの特質や、物質的基盤（水、食料、燃料、材木、ゴミ問題、

人の流れ）と精神的基盤（宗教、象徴性、呪術性、霊性）と技術的基盤（芸術、技芸、学問）という3つの基盤など、自然・生態・宗教・文化の諸観点から解明しつつ討議。このシンポジウムの記録『平安京のコスモロジー』は、2009年11月に創元社より出版予定である。（鎌田）

### 「このころの広場」第3回

日時：平成20年12月6日14時～16時半  
場所：稲盛財団記念館3階大会議室  
演題：「脳科学と社会の関わり」  
講演者：川人光男（国際電気通信基盤研究所〈ATR〉脳情報研究所所長）  
参加者：120名

最近では脳ブームと言うべきか、脳についての話題がいろいろな所で取り上げられることが多くなった。「脳科学者」と称する人たちが、様々なマスコミを通して「最先端の脳研究の知見に基づく」ユニークな学習法や育児法、あるいは脳を活性化する方法を解説されるのを目の当たりにする。脳研究を地道に行っている者

からは、「どうしてそんなことが言えるのだろうか」と思うような発言もよく耳にする。

このような脳科学ブームの中で、本当の意味での脳研究の第一人者であり、特に理論神経科学および工学的な観点では世界の脳研究を牽引する1人である国際電気通信基盤研究所（ATR）脳情報研究所所長の川人光男先生に講演をお願いした。

川人先生は小脳における運動調節機能に注目し、その学習モデルを提案すると同時に、そのモデルを利用することにより、ロボットが学習により様々な行動を獲得することができることを明らかにしている。当日は、このモデルの話を皮切りに、ロボットによる行動の学習のようす、さらには、最近川人先生のグループが取り組んでいる脳・機械インターフェイス（brain-machine interface, BMI）の研究まで、脳の働きに関する基礎的な研究から、その成果を応用した最近の研究、そしてこのような研究により生じる倫理的な問題まで、脳研究の最前線で行われている研究とその社会との関わりについてお話ししていただいた。（船橋）



「第3回このころの広場」会場風景



---

## 編集後記

「研究者は、未来について語るのが苦手ですね」。患者志向 (patient-oriented) の研究の重要性を語られた井村先生のこのことが強く印象に残っています。医学 (からだ) の世界と心理学 (こころ) の世界は密接につながっています。「誰に向けての研究なのか」。このことをはっきり自覚することで、こころの学問は今よりももっと、人間志向の学問に育つはずです。そうなれば、研究者も未来を語ることに臆さなくなるでしょう。(吉川)

第3号が仕上がった。今号も大変充実していると思う。それぞれ読み応えがあり、考えさせられる。そして楽しく、活力が湧いてくる。こころの未来がどこか、見えてくる感じ。原稿あるいは座談会にご寄稿・ご協力いただいた先生方、本当にありがとうございました。おかげさまで、力強い誌面を作ることができました。これを、日々の研究・教育・実践活動につなげていきたいと思います。(鎌田)

皆さまのお陰をもちまして第3号も無事に完成しました。今回はわたしも座談会に出させていただきました。こういうものは本来、功成り名を遂げた方がするものとの思いもあって肩に力が入り、特に「はてな」の近藤社長との座談会ではずいぶんと意味不明な発言もしてしまいました。他の方々が良いことをおっしゃっていることに免じて、ご勘弁いただければ幸いです。(平石)

本誌は原稿を書かれた先生、座談会に出席していただいた先生など、多くの先生方の高いエネルギーが結集する場なのだと思います。その場のエネルギーをストレートに読者の方にお届けしたいと思って編集を進めておりますが、お気付きの点などございましたらお知らせいただければ幸いです。最後に、お力添えをいただいた先生方、本当にありがとうございました。(原)

発行日	2009年9月30日
発行	京都大学こころの未来研究センター 〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46 京都大学稲盛財団記念館内 電話 075-753-9670 FAX 075-753-9680 <a href="http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/">http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/</a>

---

表紙写真	大石高典
編集・制作	編集工房レイヴン 原 章
デザイン	鷺草デザイン事務所 尾崎閑也
印刷	株式会社NPCコーポレーション

---

